

本日の旧約聖書に選ばれておりましたのは、申命記の30章でした。申命記はモーセを先頭に40年かけて、イスラエルの人々が四百三十年住んだエジプトを出て約束の地への旅を進め、目的地を目前に控えたところでモーセが人々を前にこれから約束の地で生きていくにあたっての説教をまとめたものです。この後モーセは間もなく世を去りますので、申命記はモーセ最後の説教であり、モーセの遺言ともいえるものです。

40年にわたる出エジプトの旅は想像を絶する厳しいものでした。40年といえば世代交代をするのに十分すぎる年月です。エジプトで奴隷として働かされ、心がすっかりくじかれてしまったイスラエルの人々は、自由を求めつつも、自由の意味を本当に理解することが出来ませんでした。自由とは奴隷として過酷な働きから逃れられるだけではなくて、困難を自分で切り開いていかねばならない、自由には責任が伴うということと奴隷のイスラエルは理解することが出来ず、困難に遭遇するたびにモーセに詰め寄り、不平を述べたのでした。

神はこうした人々をご覧になり、一番の近道を行けば一ヶ月で到達できる道へ人々を導かず、荒野への道をいかせ、40年の旅をさせたのでした。その間に人々は世代交代し、約束の地を目前に控えた時にいた人々は、奴隷のイスラエルではなく、旅の途中で生まれた砂漠のイスラエルであったのです。モーセ自身もまた、約束の地を一望に見渡したところで、入ることは許されず、世を去ったのです。

「わたしが今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは命を得、かつ増える。あなたの神、主は、あなたが入って行って得る土地で、あなたを祝福される」。

モーセのこの言葉は、40年にわたる導きの中で、神と人々の間で働き、苦しみ、そしてその使命を終えようとしている者の言葉として語られているのです。

フィレモンへの手紙の記者は使徒パウロです。本書はパウロの個人的色彩の濃い手紙で、書かれている内容は、オネシモという1人の人物をフィレモンのもとに送り返すということでした。フィレモンは、恐らくエフェソでパウロと出会い、キリスト者となった人物と思われます。彼は自分が住んでいた町コロ

サイで、キリスト者の集会を始め、そこには「家にある教会」(2) と呼ばれるキリスト者の集りが出来ていました。フィレモンはオネシモを初めとする奴隷を使っていた(16) と思われますので、この町でも豊かな生活をしていただと考えられます。

そのようなフィレモンの家の奴隷の1人だったオネシモが、どういう事情かはわからないが、主人フィレモンに何らかの損害を与えて(18) ローマに逃亡してしまいました。オネシモは当時の大都会ローマでキリスト者に出会い、獄に入れられていたパウロのもとに連れて来られたのです。そこでパウロの指導により回心しキリスト者となったのでした。

当時、主人のもとを逃げ出した奴隷は、発見され次第、有無を言わず死刑に処せられるのが普通でした。そのような社会的背景のもとで、パウロは回心したオネシモを主人フィレモンのもとに帰すべきかどうかで悩みました。送り返せば当然、オネシモは死刑に処せられてしまいます。とって、もしフィレモンがキリスト者であるが故にオネシモを赦し、処罰しないとすれば、フィレモン自身が当時の社会から強い批判を受けることになるでしょう。このような状況を心配して、パウロはオネシモを送り返さず自分のところにとどめておこうとまで考えたのでした(13)。

しかしオネシモの主人はフィレモンなので、フィレモンの許可なしにはとどめておくことは出来ないというパウロは判断した。とすればオネシモを送り返す以外にはありません。

キリストにある愛は、その社会の矛盾を乗り越えて新しい人間関係をつくり出す力を持っています。パウロはこの愛の力に信頼を置いていました。パウロはフィレモンの愛と、主にある兄弟という新しい関係に訴えて、オネシモを受け入れるようにこの手紙を書いています。オネシモが回心してキリスト者になったこと、損害はパウロ自身が代って支払うことを強調して、パウロはフィレモンに手をつくようにして懇願しています。そこにはパウロが、オネシモの代りに処罰を受けてもよいという思いが込められています。そのような意味でこの手紙は、ローマの牢獄につながれていたパウロが、自らの命の不安をすべて主なる神に委ねつつ、この愛の実践の手紙を書いたと言うことが出来ましよう。